

山の百花

遠足員 龍尾 早苗

【31】イワブクロ

七月、後方羊蹄山へ登った。七合目附近、ダケカンバの樹林から開けた火山礫のガレ場に出た、空が近くに感じた。八合目まではガレ場のトラバースとなる。慎重に、そして足元に目をやると、ホタルブクロを思わせるピンク色の花が揺れていた。降りてきた霧にぬれ潤んだように、ピンク色のジュウタンを敷きつめていた。

初めて見るイワブクロの花の群生に感激「キレイ」思わず声が出てしまった。岩礫の斜面の下まで埋めつくすように見事だ。風が少し冷たく感じる。レインウエアを付けると視界が狭まった。岩礫の斜面を幾つかトラバースをする。風が出てきて、霧は雨となり横殴りに降りかかる。イワブクロの少し下向きの花は大きく揺れて、風で千切れそうになる。それでもしなやかに、群れて咲いている可憐な姿は、一人で霧の中を登っている私の心を「ほっ」とさせる。立ち止って屈んで花のフクロの中を見た。チシマギキョウに似た花形である。花ピラ

の周りに白い髭がある。北海道の花に髭のある花が多いのは、気候と深い関係があるのかもしれない。葉も肉厚でやや広く、北の短い夏の太陽の恵をその葉に貯えて鮮やかな色の花を咲かせるのであろう。

一人で登っていることへの不安はずっとつきまとい続けている。そんな山行の途中で花に合うことは、どんなに気持ちを穏やかにしてくれることか。特にピンクや薄紫色は優しさを感じ、「よし！山頂を目指そう」と勇気のようなものを与えてくれる。



【32】キバナシャクナゲ

キバナシャクナゲの咲く山は本州にもあるが、花の時期に出合ったことはなかった。

30センチ程の樹高の樹を地面に這わせている。強い風が吹きつける斜面は、植物が生育するのにとても厳しい条件だ。常に風が吹きつけられて背丈を伸ばすことが困難だ。ここ後方羊蹄山の山頂直下の斜面を、力強く被っていた大群落のキバナシャクナゲ。一面がクリーム色である。

花の直径が4.5センチはあるだろうか、透明感のある花ピラは、羽二重の布のようにしっとりとし、濃い緑の葉の間から、花の固まりが重なり合うように首をもたげている。霧が降り花の色は尚一層透明感を増し、気品を漂わせて、秀麗の美人を連想させる。霧雨の降る九合目から山頂への広いカールに咲き競う。

今日、私は登ってよかった。山頂を目前にしてしばらくたらずで、広いカールの満開のキバナシャクナゲの景色を脳裏深く焼きつけた。

山頂直下の広いカール一面に、キバナシャクナゲが女王のように霧のベールに包まれて咲き誇っているのに会え、稜線までの数分間をキバナシャクナゲとの会話を楽しみ、山頂へと足を運んだ。